

ルカ18章18-23節 「主に近づいても近づけない人」

1A 神にある永遠の命 18-19

1B 幼子のイエスへの接近 18

2B 良い方 19

2A 戒め 20-21

1B 戒めにある命 20

2B 人間の戒め 21

3A 捨てる決断 22-23

1B 隠された偶像 22

2B 非常な悲しみ 23

本文

ルカによる福音書 18 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、前回でルカ 18 章 8 節まで来ました。午後礼拝で、9 節から最後までを一節ずつ見ていきたいと思えます。今朝は、18-23 節に注目します。「18 また、ある指導者がイエスに質問した。「良い先生。何をしたら、私は永遠のいのちを受け継ぐことができるのでしょうか。」19 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『良い』と言うのですか。良い方は神おひとりのほか、だれもいません。20 戒めはあなたも知っているはずです。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。あなたの父と母を敬え。』」21 するとその人は言った。「私は少年のころから、それらすべてを守ってきました。」22 イエスはこれを聞いて、彼に言われた。「まだ一つ、あなたに欠けていることがあります。あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」23 彼はこれを聞いて、非常に悲しんだ。大変な金持ちだったからである。」

聖書には、いろいろな人がイエス様のところに近づいてくるのが記録されています。多くの場合は、群衆がイエス様のところにいつもいます。病人が多く近づいてきました。誰かに担がれて、イエス様のところに来る人たちもいます。そして、罪人と呼ばれる人々がイエス様のところに来て、イエス様がその人たちと食事をするので、パリサイ人がそれを非難しました。興味深いことに、弟子たちについては、イエス様のほうから近づくことが多いですね。網を洗っていたペテロとヨハネに、舟を出しなさいと言われたのはイエス様でした。取税人のマタイに声をかけたのはイエス様でした。イエス様の弟子として生きるのは、自分が近づくというよりも、イエス様の言われていることに聞いて、付いてきているということですね。

いずれにしても、近づいてくる人たちがいますが、パリサイ派や律法学者が近づく時は往々にして、イエス様に議論を吹かけたり、その間違いを指摘するために近づいてくるものです。「神の

国がいつ来るのか」と尋ねたのを、私たちは前の章、17章で読みました。けれども、聖書には誠実に近づこうとしている宗教指導者も見られますね。有名なのはヨハネによる福音書3章にある、ニコデモです。彼はパリサイ派で、サンヘドリン(ユダヤ議会)の一員で、そして老齢でした。人々がイエス様のところに来ている屋間ではなく、夜に、尋ねに行きました。そして、「ヨハ 3:2 先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのであれば、あなたがなさっているこのようなしるしは、だれも行うことができません。」ニコデモは、イエス様が行われていた徴を見て、それでこの方が神から来られた教師だと思って、近づいて行ったのです。

1A 神にある永遠の命 18-19

1B 幼子のイエスへの接近 18

この指導者も似ていますね。彼も、何かに触発されてイエス様のところへ近づいて話しかけました。「良い先生。何をしたら、私は永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。」とのことで、何をもちて彼は、永遠の命のことを聞き出そうとしたのでしょうか？その前の出来事です、人々が自分の幼子たちを連れて、イエス様に触れていただくとしたのです。それで弟子たちが辞めさせようとしたのですが、イエス様は、幼子たちを呼びよせて、こう言われたのです。「18:16-17 子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。まことに、あなたがたに言います。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」子供たちを受け入れるイエス様を彼は見たのです。子供たちが近づくを受け入れ、それが神の国を受け入れることなのだとしたのです。そこに、彼の心の渇きが起ったのでしょうか。そこに何かがあると思ったのでしょうか、その欠けているものが、「いのち」だったのです。いのちと言っても肉体の命ではなく、霊の命であり、永遠の命です。

私たちが、例えば自分の大変尊敬する人が講演などをやっている時、その後で、何か聞きたいと思っても、周りに人がたくさんいて、行けるようなものではなかったとします。それでも、人が群がっているところをかき分けて、その人に話したいこと、聞きたいことがあったら、それは切実な問いかけだと思いますね。それが、この指導者の姿だと思います。他の福音書では、彼は青年です(マタ 19:20)。

彼の質問が、「何をしたら、私は永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか」というものです。彼は何かをすることによって、永遠の命を受け継ぐことができているようです。私たちクリスチャンは、永遠の命と言えば、イエス様を信じることだと思っていますが、その通りです。けれども、彼がどのように永遠のいのちを考えていたかを考えてみたいと思います。旧約聖書にある、永遠の命の約束です、ダニエル書12章2-3節を読みます。「ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。賢明な者たちは大空の輝きのように輝き、多くの者を義に導いた者は、世々限りなく、星のようになる。」自分が死んでも、終わりの日に主が全ての人を甦らせませす。そして、ある人は永遠の嫌悪、つまり滅ん

で、永遠の苦しみを受けるのですが、またある人は、永遠の命を得るのです。その人たちは、多くの人々を義に導いた人とあります。ここですね、指導者が尋ねているのは、自分がどのような義を行い、また他の人を義に導くことができるのか？では、何をすればよいのか？ということです。

2B 良い方 19

イエス様の返事は、意表をつくようなものでした。「なぜ、わたしを『良い』と言うのですか。良い方は神おひとりのほか、だれもいません。」以前の改訂版の聖書ですと、「尊い先生」と指導者が行っていました。けれども、「良い先生」が正しいです。イエス様がここで問いかけているのを理解するには、ギリシア語の意味を知る必要があります。「アガソス」と言いますが、これは本質的な善を意味します。他に「カロス」というギリシア語もありますが、それは外面的な善のことです。普通、ユダヤ教の教師に対して、アガソスを使いません。カロスを使います。つまり、ここで指導者は、イエス様に普通の教師以上の呼び名で呼んだ、ということなのです。

イエス様はここで、「良い方は神おひとりのほか、だれもいません。」とされています。そうですね、本質的な善は神にしかありません。ユダヤ人たちは、「良い方」と聞いたら、それは神ご自身と理解していました。ヘブル語ですと、トブです。主が、天地を造られて、それをよしと見られたと言われた時に、それが「トブ」でした。神が良き方だという根本的な真理から、全ての事が始まります。神は良い方であり、神は善であられるから、この世界で起こっている全てのことは、神を愛する者たちにとっては、必ずや善へと向かっていると信じていることができるのです。

イエス様は、ここで、「神だけが良い方なのに、それをわたしに使っているということは、あなたはわたしが神であるとしているのか？」と尋ねておられるのです。イエス様は、ご自身からそれは間違っているとも、当たっているとも言われませんでした。イエス様とて、ご自身をそのまま神であると強く主張することはなさいませんでした。むしろ、人々に起こされた心の渇きにしがたって、ご自身が父なる神と一つであることを自ら気づかせるように、そっと語られました。

この指導者が陥っていた過ちは、当時のユダヤ人だけでなく、一般の私たちも同じです。彼は、子供たちを受け入れるイエス様に、この子供たちが神の国を受け入れるように受け入れなければ、そこに入ることができないと言われた、その言葉に実は、心が動かされていたのです。そこに、実は永遠の命があるということです。つまり、関係性です。イエス様が子供のように受け入れておられる、その結びつきに命があるのであり、イエスご自身に永遠の命があることを知っていたはずなのです。けれども、彼は何か自分の行いで関係を見出すことができるように勘違いしていました。

世の中には、マニュアルがあります。マニュアル文化がありますね。私は年時代からずっと東京で暮らしていますが、関西に行くと驚くことがあります。普通のレストランで、普通にお客さんに店員が話しかけてくれるのです。東京では、お客さんに対してマニュアルに従って動かなければいけないので、気軽に声をかけることはまずないですね。どちらが、心が通っているように感じるでしょ

うか？もちろん、自然に声をかけてくれることです。ここには関係を結ぼうとする姿勢があるからです。マニュアルは、お客さんの為ということはもちろんありますが、ガイドラインとしては使えても、まるで人が機械であるかのように動かし、無機質で、命を無くしてしまう原因にさえなりかねません。

私たちは、「命」というものが関係性から出ているのに、何か自分が行うことで得ようとして。そしてパリサイ派と同じように、自分はこれこれのことをして、一定の基準に達したら、それで神により近づけるようになったということを自分の頭の中で整理しようとして。自分ができているか、できていないかで判断するのではなく、単純に、イエスが誰なのかを仰ぎ見ることです。イエス様を仰ぎ見るのです。イエス様は、「ヨハ 14:1 神を信じ、またわたしを信じなさい。」と言われました。

2A 戒め 20-21

1B 戒めにある命 20

そしてイエス様は言われました、「**20 戒めはあなたも知っているはずで**す。『**姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。あなたの父と母を敬え。**』」イエス様に取り上げられたのは、モーセの十戒で、しかも人に対して行う戒めです。第一の戒めから第四の戒めは、神に対して行うことですが、第五以降は人に対する戒めです。ただ、第十の戒め、「欲しがってはならない」をイエス様は飛ばしておられます。第六の戒め、姦淫してはならないから言われて、それで第十は抜かして、第五の戒め、父と母を敬えに戻っておられます。イエス様はここで、「何をしたらよいか、とって自分を意識するのではなく、隣人に目を留めなさい。」と言われているかのようであります。彼の問題は、富にあるとありますが、実はその富への執着は、その根っこに自分のことしか考えていないということがあります。神意識ではなく、また隣人意識ではなく、自意識が強すぎるのです。

そもそも、戒めとは、神を愛しているから守っていくものです。戒めによって命を得ることを、モーセはイスラエルの民に話しました。「申 30:15-16 見よ、私は確かに今日あなたの前に、いのちと幸い、死とわざわいを置く。もしあなたが、私が今日あなたに命じる命令に聞き、あなたの神、【主】を愛し、主の道に歩み、主の命令と掟と定めを守るなら、あなたは生きて数を増やし、あなたの神、【主】は、あなたが入って行って所有しようとしている地で、あなたを祝福される。」主がイスラエルをこよなく愛されて、エジプトから救い出してくださいました。ゆえにイスラエルの民は神を敬い、神を愛します。神を愛する時に、その命令を守るのです。ですから、神を愛している中で、その命と幸いを保つことができます。戒めも、神との関係性の中で守っていくものなのです。

2B 人間の戒め 21

しかし、この青年はそうは考えていませんでした。「**21 するとその人は言った。「私は少年のころから、それらすべてを守ってきました。」**」少年のころから守って来たと言っています。つまり、物心がついた時から、ここにある戒めを守って生きてきましたと言っています。事実、彼の意識の中ではそうだったのでしょ。う。すぐ真面目な青年だったので！けれども、守っているのに、それでも

永遠の命を得られているのかどうか分からなかったのです。

イエス様が子どもを受け入れておられるところに、おそらく自分が少年の時に欠けていたものを見たのかもしれませんが。そうやってイエス様が幼子たちを受け入れ、この子たちが神の国に入るのだと言われるのですから、では、自分は少年の頃から戒めを守っていたけれども、自分は神の国の中に入れるのか？という問いかけだったのです。これは、放蕩息子の喩えにも通じますね。兄息子が、父が弟息子を受け入れて、祝っているのを怒って、家の中に入っていきたくありませんでしたが、兄息子は父にこう言いました。「15:29 ご覧ください。長年の間、私はお父さんに対してお仕えし、あなたの戒めを破ったことは一度もありません。」彼は父の近くにいたけれども、心は遠く離れていました。父の心が分かっています。ここの青年も同じ過ちを犯していたのです。

3A 捨てる決断 22-23

1B 隠された偶像 22

22 イエスはこれを聞いて、彼に言われた。「まだ一つ、あなたに欠けていることがあります。あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」

イエス様が欠けていることを指摘されました。それは、自分の今、持っている物を売り払い、貧しい人に分けて上げなさいということです。彼の問題は、心の中に富が偶像となっていたのです。神の戒めの中には、貧しい人に施しをするというものたくさんありますが、パリサイ人たちの中ではアブラハムが富んでいたの、富んでいることは神の祝福だと考えていました。それは一面、そういうことがあるかもしれませんが。ビジネスマンが多くの財を成して、それを御国のために大体的に投資していくことはありますから。けれども、彼はそういったことではなく、富に魅かれていたのです。私たちが、何をすればよいか？という、マニュアルであるかのように自分のすることに意識を向け、自分に意識を向けている時に、最も大事な、神様に対する心と、隣人に対する心を失ってしまうのです。

金持ちになることで起こって来る問題は、「自分」に集中することです。金持ちの喩えの時に、イエス様が言われたことを思い出してください。「12:17-19 彼は心の中で考えた。『どうしよう。私の作物をしまっておく場所がない。』そして言った。『どうしよう。私の倉を壊して、もっと大きいのを建て、私の穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。「わがたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。』」ここで英語ですともっと浮彫にされていますが、「私が」「私の」という言葉を連発しています。自分自身のことばかり語っているのです。金持ちとラザロの時もそうでしたが、金持ちの問題は金を持っていること自体ではなく、ラザロが彼の家の戸口にいるのに、何ら声をかけなかったということ、その関係を持つともしなかつたということです。これが問題でした。

ですから、私たちは、非常に身近なところで、偶像を心に持っていることになります。自分がいかに戒めを守っていくか、自分がいかにどうやっていくか、やっついていかないか、ということに集中しているならば、実は他者を省みない、神を省みない心になっていて、それはすなわち偶像礼拝になっているのだということです。あくまでも象徴的にということですが、電車の中でほとんどの人がスマホを見ている姿を見る時に、社会をよく表しているなど感じます。物理的に一緒にいるのですが、一人一人は自分のことしか考えていません。何かしてあげても、それは相手のことを思ってではなく、恐れで動いていたたり、自分を守るために動いていることがあります。私たちは心を広げないといけません。神に対して開き、そして周囲の人に対して開かないといけません。

2B 非常な悲しみ 23

23 彼はこれを聞いて、非常に悲しんだ。大変な金持ちだったからである。

この指導者が、非常に悲しんだのが、私は悲しいです。自分に欠けがあったのを知った時は、それは喜びであるはずですが。「詩 139:23-24 神よ私を探り私の心を知ってください。私を調べ私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるかないかを見て私をとこしえの道に導いてください。」自分に傷のついた道があるというのは、欠けがある、罪があるということです。これを歌ったダビデは、自分に欠けがないかどうか、どうか知ってくださいと祈っているのです。自分に欠けがあることを知れば、その砕かれた魂を主は決して蔑まれません。「詩 51:17 神へのいけにえは砕かれた霊。打たれ砕かれた心。神よあなたはそれを蔑まれません。」砕かれた魂には、神の救いが現れます。そこに救いの喜びが湧きあがります。

ところが、この指導者は自分の欠けが示されたら、非常に悲しくなっただけで、それで終わってしまったのです。他の福音書では、「去って行った」とあります。これでは、滅んでいってしまうばかりです。「Ⅱコリ 7:10 神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」このようにして、イエス様に近づいたのに、近づけず、去って行った人の悲劇があります。それは、ひとえに、とても単純なこと、つまり、自分が子供のよう

に神の国を受け入れなかったということです。

永遠のいのちは、どこにあるのか？それは、イエス様のところに近づいた子供たちのように、イエス様ご自身にあります。「Ⅰヨハ 5:12 御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。」イエス様のところに行くこと、これが命です。私たちは、繰り返しますと、マニュアル文化の中に生きています。こうやって、こうすれば、このようになる、ということを教え続けられています。しかし、鍵は、子供のように自分を低くすることです。自分で何かをするのではなく、神にしかできないことを告白することです。自分を無にすることです、自分には欠けたものがあり、ことごとく何もできないことを知ることです。そして、いのちは自分にはなく、自分は罪の中で死んでおり、キリストの内にはいのちが隠されていることを知ることです。